Mercure galant（メルキュール・ギャラン）

Lyon ： Thomas Amaulry , 1672－1710

「メルキュール・ギャラン」は、国王ルイ14世時代のフランスで1672年に創刊され1710年まで続いた定期刊行物である。当時の出版物は国王の統制下にあり、「メルキュール・ギャラン」は情報や話題や戦況などを掲載する雑誌として特別な国王許可を得て発行されてきた。1672年はオランダとの間で戦争が始まった時代であり、スペインやイギリスをも巻きこんだこの戦争が終結したのが1678年である。したがって本館所蔵の1678年の「メルキュール・ギャラン」は、長く続いた戦争が終わったことを喜び、国王の栄誉を称え、平和が戻ったパリの様子や貴族らの消息を伝え、ギャランな（「優雅で洗練された」の意）小説や話題を盛り込みながら上流人のモードにも触れている。読んでいくうちにルイ14世代の情報が書き込まれた貴重な歴史記録であることに気づく。記事の概略を挙げると、ニメーグ（ナイメーヘン）の講和会議によってイープルなどの都市を獲得した国王の勝利を称える文章から始まり、歌声と器楽がとけあう美しい歌曲（譜面つき）の紹介、アカデミーの詩編、訃報、オペラ歌詞の紹介、結婚報告と婚礼、王太子のフォンテンブロー滞在、新刊の系譜、歴史人物、などの記事が前半の50ページをしめる。次いでパリの北方マルヌの城で行なわれた祭りの様子が詳細に語られる。月曜から土曜までそれぞれ趣向を凝らしたダンスや音楽が演じられ、最終日の美しい歌声と音楽と打ち上げられた花火に「これこそ平和の到来である」と著者は結ぶ。栄光を称えるモニュメントの計画やメダルのデッサン、謎々と解答などに続いて最後に17ページにわたるモードの解説があり、折込みの銅版画が添えられている。「今年は秋の長雨が続き夏から冬へ急

1678年　冬のアビ

1678年　冬のローブ

に気候が変わったために夏と冬のモードをとりあげる」と断ってから、金糸や銀糸が入ったアビ（habit＝上着）の解説が始まる。戦争の間に禁止され厳しく規制されていた金銀糸の使用が解かれて「褐色の濃淡のラシャに金銀糸を刺繍したアビ、畝織りやモワレやベルベットに金銀糸で文様を織り込んだ絹のアビ、アビ裏地には華やかな真紅。女性はポワン・ド・フランス（フランス・レース）を模した刺繍のスカートや灰色味のサテン地に花模様などさまざまな布が使われている」と新しい布や色を解説し、パリはブルドンノワ通りの仕立屋ゴルチエの名をあげる。「豪華な布を使うゴルチエが仕立てるマントはネグリジェ・スタイル。彼はアンディアンヌ（インドのプリント綿布）でローブを仕立てたりする」とゴルチエの機知を評価、さらに国王が側近にのみ許可した上着ジュストコル（just-au-corps de brevet）には金銀糸の刺繍が認められていること、宮廷では一般にはフランスやスペインのレースを縫いつけて刺繍の代りにしていること、スカーフは金銀レース、ボタンは金メッキ、靴のバックルも金、そして肩と剣にはリボンを二重に飾るのが宮廷モードであると説明が続く。銅版画の貴族の姿が参考になる。ここで著者はシャルリエ（Charlier）の紹介を始める。「シャルリエはパリ近郊サン・モールに新たに王室御用達の織物工場を建てた。そこでは金銀の織物、ペルシャやイタリアを真似た絹織物、ベルベット、ダマスクなど最高の品質の布を織り、製品はパリのクートゥルリー通りの店で小売りしている。彼はあらゆる布を織る才能を持ち家具用にも使われている」と賞賛している。この記事はフランスにイタリア並みの高級絹織物が登場したことを示唆する史料になっている。シャルリエについての詳細は不明だがリヨンで絹織物業が興隆する前にパリに金や銀の布を織る職人がいたことを証明する貴重な記録である。ついでながら建造中のベルサイユ宮において、国王の愛妾となるフォンタンジュ接見のニュースと彼女の容姿について書かれたコメントもある。仔細に読めばいろいろな話題が詰まっている。

1672年の創刊号から1674年までの「メルキュール・ギャラン」の復刻版（ジュネーヴ 1982年）が本館にある。創刊号の前書きで出版者は、パリや地方や外国の珍しい出来事や好奇心をかき立てるニュースを知らせてほしいと読者に依頼しながら、ギャランな男女の話や芸術や科学の話題、新書や詩などを紹介したいと抱負を語っている。確かに建築アカデミーの設立に関するコメントや、ラシーヌの戯曲「バジャゼ」の開演や文学アカデミーの詩作の紹介、そして音楽家リュリによるバレエ公演を絶賛する記事など、学術団体アカデミーの活動がたびたび取り上げられており、1673年に死去したモリエールへの追悼文もある。文化の面で古典主義を趣旨とするアカデミーが果たしていた役割が大きかったことが実感される。また貴族に所属する歩兵の連隊・中隊の数と歩兵の総数、同じく騎兵隊の編成と総数を知らせる記事、また海外に派遣された軍隊の数や軍船のリストなどの記事は、オランダ戦争の開始と緊張を伝えると同時にフランス軍の規模が推測できる。軍の移動や捕虜や外交官らの動き、野戦場や包囲戦のニュースは、パリでは貴重な情報でもあっただろう。貴族らのギャランな話や時折のモードを伝えるだけの娯楽誌ではなく、同時代のフランスの国策と王侯貴族の職務や職責にも触れた国王公認の広報誌でもあったことを認識させられる。　（辻 ますみ）